進修同窓会々報

発　行　土浦一高進修同窓会
編　集　同窓会会報編集委員会
〒300-0051　茨城県土浦市真鍋4-4-2
TEL(029)822-0137㈹ FAX(029)826-3521
ホームページ http://www.sin-syu.jp/

会長あいさつ

会長　大野金一（高8回）

今、新型コロナ対策として、３密を避けるために、大勢が集合する会合には自粛を求められ、コロナ以前とは、生活の在り方が大きく変わりました。

そうした中で、４月12日に予定していた今年度の進修同窓会総会も、その７日に、安倍首相（当時）から東京都など７都府県を対象に緊急事態宣言が発令され、更に茨城県知事からも学校休業や外出自粛の要請が発表されたことから、止むを得ず、中止といたしました。そこで、今年度は、３月21日に開催した評議員会の議決を以て、総会に代えることとしたのであります。各支部での総会も、ウェブ会議など、ほぼ同様の方法で開催されたことと思います。同窓会は、同窓生が対面し、会談してこそ意義がありますので、まことに残念な事態に至っております。

一方で、とかく、最近の若い世代には、同窓会に関心がないように見受けられます。旧制土浦中学時代の卒業生は少なくなりましたが、過去それぞれの時代を生きた先輩との交流には、大きな意義があると思います。同窓会の活動は、実質的には各支部において行われていますので、各支部においても、積極的に若い世代を受け入れる努力をしていただくようお願いいたします。

ところで、今年６月、昭和44年卒の松井泰寿氏（高21回）が、『戦時下の土浦中学生』との著書を上梓されました。松井氏が執筆され、本会が発刊している『月刊アカンサス』に連載した記事や卒業生の文集などのそれをまとめて、自費出版されたもので、一時代の歴史を知ることができます。特に、昭和20年の本校の創立記念日に特攻機で出陣し、散華された先輩については、多くの時間をかけて収集した資料を得て筆を進めたものです。平和時に教育を受けた後輩としては、先輩が目指した分も社会に貢献しなければ、という気持ちに駆り立てられます。同著は非売品なので、同窓会のホームページで『月刊アカンサス』のバックナンバーをご覧いただければと思います。

その旧制中学校ではありませんが、来年度から茨城県立土浦第一高等学校附属中学校が併設されます。２クラスだけですが、中高一貫教育のメリットを十分に生かしてほしいと思います。

新型コロナ感染は、集団免疫ができるか有効なワクチンができるまでは、３密対策をし、コロナと共存していかなければなりません。歴史的な転換を強いられますが、重症化を避けるには、結局、抵抗（免疫）力です。

皆さんのご健勝をお祈りいたします。

校長あいさつ

校長　植木邦夫（高31回）

進修同窓会の皆様には、日頃から、本校教育活動の発展のために、物心両面に亙るご支援を賜り、深く感謝申し上げます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「受験という大舞台に臨む生徒たちには、『平常心』で、思う存分に力を発揮してもらいたい」……いつもなら、適度な〝緊張感〟と心地よい〝期待感〟とに後押しされて迎える受験シーズン。今年で最後となったセンター試験で幕開けした令和2年のシーズンは、日を追う毎に、想像を絶する〝脅威〟に覆われることになりました。東大や京大などでは、新型コロナウイルスに感染して欠席した場合でも、特別な救済措置を設けないとし、国立大の個別試験での対応は、分かれる状況も生じました。そのような中、本校生徒は、最大限の感染予防対策を講じつつ、一高で鍛え上げた克己心を糧にして、自らの志望実現に向けて、遺憾なく力を発揮してくれました。

しかしながら、新型ウイルス感染防止の観点から、3月1日の全日制卒業式には在校生は参列を控え、第72回卒業生には寂しい想いをさせてしまいました。加えて、その翌日から終業式前日まで、学校は、臨時休業の措置を採らざるを得なくなりました。

4月、新たな年度が始まり、幾多の制約に縛られながらも、始業式、入学式を挙行することができました。しかし、国の緊急事態宣言に伴い、県から、土浦市を含む10市町が、感染拡大要注意地域に指定され、入学式翌日から、本校も、約2か月間は、再び臨時休業となり、オンラインなどを駆使しての、学習環境の整備に係る検討を余儀なくされました。

この間、例年盛大に開催されております進修同窓会総会及び卒業周年祝賀式も、大野会長をはじめとする本部役員の方々の慎重なるご判断により、中止となりました。致し方ないことと承知はしつつも、誠に残念なことでございました。

本校におきましても、6月開催予定でありました、伝統の「一高祭」も、SEGをはじめとする全ての海外研修も、止むなく中止の決定を下しました。それでも、学校再開後は、全日制、定時制ともに、授業は勿論のこと、様々な学校行事、そして日々の部活動及び大会出場において、少しでも〝これまで〟に近づけよう、と教職員・生徒が知恵を出し合い、前向きに取り組んでおります。

このような状況において、土浦一高としての最大の課題は、何か。それは、「継承」だ、と考えています。

コロナ禍のため、全ての教育活動で、いわゆる〝3密〟を避けることが、優先されています。現時点（9月）で、本校では、全校生が一堂に会しての取組や活動は、未だに一度も行えておりません。「自主・協同・責任」の校訓の下、長き歳月を経て培われてきた一高の良き伝統、気風、そして文化を、コロナ禍でどう次代に継承していけば良いのか、学校として、正面から受け止めなければならない課題です。そしてこれは、これまで以上に、進修同窓会を中心とした「土一ネットワーク」からのお力添えを頂かなければ、克服できない課題でもあります。

令和3年4月には、土浦一高附属中学校が開校します。その目指す学校像には、「土浦一高の良き校風を継承・発展させる。」の文言を組み入れております。

新任職員紹介

全日制教頭　櫻井　隆之

勉強にとどまらず、部活動、学校行事など学校生活のすべての面にチャレンジする「一高スタイル」は、理想の高校生活の形です。その実践のために高い志を持った生徒が集まる土浦一高の一員となれたことを大変嬉しく思っています。

コロナ禍により「一高スタイル」への日々の取り組みには、様々な制約を受ける状況ですが、こんな時こそ「土一ネットワーク」である同窓会の皆様の力を最大限にお借りしながら、厳しい状況を乗り越えられるよう力を尽くしていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

定時制教頭　新堀　隆久

同窓会の皆様には、日頃より本校発展のため格段のご理解とご協力とを賜り、厚く御礼申し上げます。今年度の定期人事異動に伴い、本校定時制教頭として赴任しました新堀と申します。教職に就いて28年目ですが、縁あって土浦市内の勤務が通算16年目となりました。歴史と伝統のある土浦一高の更なる発展のため、微力ながら力を尽くして参りたいと思いますので、今後ともよろしくお願い致します。

附属中学校　教頭　中島健一郎

進修同窓会の皆様には、日頃より本校の教育活動に深いご理解と多大なるご協力とを賜り、まことにありがとうございます。今年4月より附属中学校教頭としてお世話になっております中島健一郎です。附属中学校の開校が土浦一高のさらなる発展につながるよう、同窓生の皆様が築いてこられた歴史と伝統を大切にし、温故知新の精神で尽力する所存です。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

令和2年度 進修同窓会総会は開かれず

～例外的に、今年度は評議員会の議決を総会の議決に代える～

今年度の総会は、コロナウイルスの関係で、各学年5名以内の参加者とするなど、かなり縮小した規模で4月12日の開催に向けて、4月初めまでは準備を進めてきました。ところが、コロナウイルスの感染拡大は収まらず、4月に入り、茨城県知事から学校休業や外出自粛要請が発表され、総会は、開催の6日前に急遽中止を決定するの止むなきに至りました。

本会報では、総会・周年祝賀式の様子やその後の学年懇談会についてのご報告を掲載してきましたが、それが今年度は叶いません。そのため、その代替として、総会時における配付資料「令和2年度進修同窓会総会」に玉稿をお寄せくださった各学年代表者の祝辞と謝辞とを掲載させていただきます。

なお、令和2年度の事業・予算などについては、各学年代表者による評議員会が、総会前の3月21日に予定どおり開催され、各議案について承認されました。今年度は、例外的に、これらを総会の議決に代えさせていただき、本同窓会諸活動を進めている次第です。会員各位には、こうした実情をご賢察賜るとともに、各議案の詳細については、進修同窓会HP「お知らせ」をご覧下さいますようお願い申し上げます。

（本部幹事　小泉　明（高19回））

以下、『令和2年度進修同窓会総会』資料から転載

周年祝賀式「祝辞」

高23回　藤川　雅海

卒業60・50・40・25・15の各周年を迎えられた皆様、本日は誠におめでとうございます。

それぞれの節目を迎え、当時を振り返られますと、感慨深いものがあると思います。私もこの壇上に立ち、当時を改めて振り返りますと、色々なことが脳裏に浮かんできます。特に、我々が学んだ歴史ある校舎が、文化財として当時の面影のままに残っていることは、一層その思いを強くさせてくれます。

反抗心旺盛で、何事にも憚ることなく、様々なことに挑戦（反抗）し、挫折も味わいながら過ごした3年間。有意義だったのか、との疑問は残りますが、全てが懐かしい思い出です。

ところで、本校は、今や全国に名立たる高校として、名声を博しております。特に、平成26年度には、国際舞台で活躍できるグローバル・リーダーを育成する実践的なプログラムであるSGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）事業に県内学校で唯一指定され、爾来、グローバル人材に相応しい素養・スキル・対応力などの習得・体得に向けた学習が、学校を挙げて展開されています。「高い知性」と「豊かな人間性」とを兼ね備えた人材の育成、との教育方針の成果が着実に出つつあることに対し、卒業生として誇り高く思っております。

さて、60周年を迎えられた方々が入学した年は、今では様々な議論がありますが、東海村に原子の火が点った年で、翌年には「こだま号」が運転を開始し、東京タワーも完成するなど、戦後の新生活に向けて歩き出している時代でした。そして皆様は、高度成長期の担い手でもありました。既に喜寿を迎えられておりますが、人生100年時代。益々、健康でご活躍されることを願っております。

50周年を迎えられた方々は、学び舎を共にした先輩ですが、学生運動が盛んな時期で、大変な思いをされた方も多いと思います。在学中は、アポロ11号の月面着陸や大阪万博がありました。たぶん現在は、仕事も一段落し、次の人生を歩んでおられる方も多いと思いますが、老け込むのはまだ早い年代。もう一花咲かせていただきたいと思います。

40周年を迎えられた方々は、在学中に、成田空港が難産の末に開港しました。現在の皆様は、人生の折り返し点でもある還暦を目前にされ、次の人生をどう歩んでいくかを考えていることでしょう。還暦は新たなスタートでもあります。新しい未来に向かって更に前進されることを期待しております。

25・15周年を迎えられた方々は、それぞれの立場で一番充実した人生を歩んでいる最中だと思います。周りからの期待も大きい分、遣り甲斐もあります。粘り強く頑張っていただきたいと思います。

本日の祝賀会はそれぞれの節目を祝う会であり、多くの仲間が集まっております。特に、同期同士は、この機会に旧交を温めながら、昔話に花を咲かせていただきたいと思います。

最後になりますが、皆様方の更なるご活躍とご健勝、並びに土浦一高、進修同窓会のご発展をお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

本日は誠におめでとうございます。

卒業60周年記念同窓会「謝辞」

高12回　飯塚　良哉

本日は、令和2年度進修同窓会及び卒業60周年記念祝賀式にお招きを頂き、心から感謝申し上げます。また、ただいまは心温まるご祝辞と記念品を賜り、高12回卒業生一同厚く御礼申し上げます。

私たちは、昭和32年春、一抹の不安を抱きながらも、青雲の志をもって入学。そして昭和35年春に卒業。同窓生は354名と記憶しております。

今、その3年間を思い起こせば、入学して間もない夏に、本校野球部は、後にも先にも、これ一度の甲子園大会出場を成し遂げました。それは、あれよあれよ、という間に県大会を勝ち抜き、県代表として北関東大会に駒を進め、ここでも栃木・群馬の各代表に勝利し、夢の甲子園出場を決めたのです。その時の選手団を迎えた土浦駅での凱旋のどよめきや、歓喜に沸き返った提灯行列は、今でも忘れられません。

甲子園では、初戦で和歌山商に圧勝。ラジオから流れた校歌を聞いた時は、胸が熱くなり涙が滲みました。2回戦で強豪岐阜商に敗れはしましたが、この年は、奇しくも創立60周年の記念すべき年で、甲子園出場という栄光の1ページを加え、秋の「創立60周年記念式典」は、大いに盛り上がりました。

そればかりでなく、私たちは、歴史的風格を備えた「アカンサス校舎」で、個性的で情熱あふれる先生たちの薫陶を受けながら、素晴らしい仲間と、文化祭やクラブ活動に没頭し、体育祭の仮装大会やマラソン大会などでは、汗と埃にまみれていました。とにかく充実した3年間であったと実感しています。

卒業後には、真鍋台にランドマークとして聳え立つ学び舎は、駒杵勤治技師の設計によるゴシック様式を基本とした西洋風建築として、昭和51年2月、重要文化財として国の指定を受けました。

ところで、私たちは、10年前の卒業50周年記念祝賀式に際し、『卒業50周年記念誌』を発刊しました。同窓生のほとんどが現役を退いた時期であり、それぞれの思い出や人生雑感などを思いのままに綴ったものでしたが、改めて読み返してみると、一層感慨深いものを感じます。

「いろいろな場面で、力を発揮できた源は高校時代に培われた。」と、また「我が人生の基礎的な思

考や行動の基盤はここで培われた。」とも語り、「良き師・良き友と過ごした3年間は人生のベースになった。」と、多くの同窓生が懐古し、「先輩や後輩たちとの交流や導き合いを得て、大いに活躍できる状況だったのも、吾が一高の伝統と誇りとがもたらす所産であったのだろう。」と、述懐もしています。

とにかく、私たちは世に名を馳せた大先輩の足跡に近親感と敬意を抱くとともに、諸先輩が長年にわたり培ってきた素晴らしい伝統に輝く土浦一高に学ぶことができた事を、この上もなく誇りに思っているところです。加えてまた、平成13年度の大学入試では、東京大学に32人が合格し、「公立高校では日本一」と報じられました。後輩たちは輝かしい実績と名声を世に轟かしたのでした。

私たちは優秀な後輩たちとともに、母校の栄えある伝統に更に磨きをかけ、校歌の一節のように、誇り高き土浦一高の校風を世に輝かせたいと、本日の祝賀式に臨み、思いを新たにしている次第でもあります。

最後になりましたが、令和の新時代を迎え、母校に学んだ先輩、後輩たちの益々のご奮闘をご祈念申し上げ、さらに母校及び進修同窓会のご発展を心からご祈念申し上げまして、謝辞といたします。

本日は、誠にありがとうございました。

（注）東京大学合格者数が最も多かったのは、平成10年3月の43名です。

卒業50周年記念同窓会「謝辞」

高22回　鈴木　良治

本日は令和2年度進修同窓会総会及び卒業記念祝賀式にお招き頂くとともに、ご祝辞と記念品を賜り、心から感謝申し上げます。また、母校で久しぶりに同窓生が一堂に集う機会を設けて頂きました事にも、重ねてお礼申し上げます。

私達は昭和45年3月に卒業しました。令和という新年号に変わってから約1年が過ぎ、高22回の私達は、卒業50周年を迎えることが出来ました。私達が入学する直前の昭和40年からは、水戸一高との定期戦（土水戦）が開始され、私は、生徒会と応援指導部の立場で積極的に水戸一高と交流した事が思い出されます。また、昭和41年から始まった「一高祭」では、その準備も含めて楽しい時間を過ごしました。私達が高校3年生の12月3日に、それまではマラソン大会でしたが、第1回「歩く会」が実施され、筑波山まで歩いた事もありました。

受験勉強に真面目に取り組まなかった私は、貴重な浪人時代を経験する事が出来ました。現役で入学した同期生達に引け目を感じながら、約半年間は石岡から高田馬場駅近くにある早稲田予備校に往復5時間かけて通学しました。浪人時代後半は阿佐ヶ谷に3畳1間の下宿を借りる事が許されましたが、諸先輩との交流を始めた為、勉強には身が入らず、残念ながら憧れの早稲田大学には合格出来ませんでした。結局神奈川大学に入学し、公害問題と、恋愛に取り組む学生時代でした。

就職の時期はオイルショックで、折角決まった会社から自宅待機を半年間命じられました。既に卒業式直前に親の費用で、同大学で同学年の今の妻と結婚式を挙げ、学割で新婚旅行をしていた私は、妻に食べさせて貰う期間が、結局2か月間ありました。その後早めに入社を許され、高度成長の時期と、低成長時代を経験して来ました。そして今は「人生100年時代」を迎えています。

現在の私は、60歳を超えた土浦一高卒業生のみが参加できるゴルフ大会の幹事長兼事務局を担当しております。昨年はその土浦一高OBゴルフ大会に、昭和28年卒で84歳になる4名を含む合計173名の皆様に参加していただきました。今年は昭和54年卒で60歳を迎える後輩達が新たに参加し、第16回のゴルフ大会を10月16日に開催する予定です。各学年8名という人数制限はありますが、ゴルフ好きの先輩・後輩方と一緒にプレイを希望される方には、学年幹事を紹介しますので、私までご連絡いただければ幸いです。

ところで、明治30年の開校以来の旧制土浦中学校・土浦一高卒業生数は3万2千人を超えました。土浦一高のホームページに、「Noblesse Obligeノブレスオブリージュ（高き位に重い務めあり）」という教育理念があります。土浦一高を卒業した若いリーダー達が、グローバルに活躍中だ、と多くの方から伺い、非常に頼もしく思います。

最後に、先立たれました先生方及び同窓生のご冥福をお祈り申し上げますと共に、卒業60周年を迎える方々を含め、同じ学び舎で過ごした皆様の、益々のご健勝とご活躍及びにご多幸を、また土浦一高の益々のご発展をご祈念申し上げて、謝辞とさせていただきます。

本日は、誠にありがとうございました。

卒業40周年記念同窓会「謝辞」

高32回　原　光広

本日は、令和2年度進修同窓会総会及び卒業記念祝賀式にお招きいただき、誠にありがとうございます。また、ご祝辞と記念品を賜りまして心より御礼申し上げます。

さて、私たち高32回卒業生は、卒業40周年を迎えることができました。昭和52（1977）年4月に入学し、昭和55（1980）年3月に卒業した学年です。

丁度、現在の校舎への改修工事の真っ直中での3年間を私たちは過ごしました。低学年の頃は、プレハブ校舎で学びつつ、今はない特別棟の階段教室や、金網の張ってあった窓（通称「鶏小屋」）の古びた佇まいに歴史の重みを感じました。3年生の時には、文化財である旧校舎の一部の取り壊し作業をよそ目に見て、貴重な青春の時期を過ごしました。また、水戸一高と競い合った土水戦の最後の学年で、声をからして応援したこと、サザンオールスターズの『いとしのエリー』を歌いまくった一高祭のこと、夏季休業中のクラスキャンプで友人の新たな一面を知ったことなど、思い出はつきません。

そうした一方で、当時は丁度現在と同様に、大きな入試制度の改革時期に当たり、私たちは共通一次試験第2期生でした。現在では、学習指導要領の改訂と大きな入試制度改革の真っ直中にあって、学校現場では、どのように対応していったらよいのか、日々頭を悩ませております。当時の先生方も私たちのために知恵を絞り、様々な配慮をしていただいていたのだろう、との思いを致し、改めて頭の下がる思いです。

私は、卒業後に、縁あって土浦一高に教員として働く機会を得ました。そして赴任したその年に、奇しくも高校1年生の時の担任であった山本茂先生が退職され、離任式で握手を交わすことができたのは、私にとって今でも大切な思い出です。

ここで、私たちが高校3年生の時の学年の先生方を紹介させていただきます。学年主任上木幹夫、副主任飯村弘、A組担任風間俊也、B組担任齋藤勝、C組担任新橋浩、D組担任水田重則、E組担任村松輝美、F組担任伊能健、G組担任中島雅之、H組担任高橋智の各先生でした。先生方の素晴らしい授業は、同じ教職に就いた者にとって、今でも良き手本であることは間違いありません。本当にお世話になりました。

これまで、土浦第一高等学校出身ということで進修同窓会の皆様には度々お世話になりました。私たちは、これからも「土浦一高生

としてのプライド」を胸に歩んでいきたいと考えております。今後とも、ご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

最後になりますが、母校土浦第一高等学校のますますのご発展と、進修同窓会のますますのご隆盛、会員の皆様のご健勝をご祈念申し上げまして、謝辞とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

卒業25周年記念同窓会「謝辞」

高47回　高辻　千恵

この度は、令和２年度進修同窓会総会及び卒業25周年祝賀式にお招きいただきまして、誠にありがとうございます。卒業25周年の節目に際し、同窓会の皆様より温かいお祝いの言葉を賜りましたことに、同期生を代表して厚く御礼申し上げます。

卒業から早25年。この間にどれほど人として成長できたのかと問われると、自分としては甚だ心許ないのが正直なところです。一方で、世の中は明らかに大きく変わりました。とりわけ近年は、社会のあらゆる場面で変化が拡大、加速しているように思います。

グローバル化の進展やＩＣＴをはじめとする様々な技術の急速な進歩などにより、「ＶＵＣＡ（不安定・不確実・複雑・曖昧）の時代」が到来したと言われています。程度の差はあれ、誰にとっても、自分の身近な暮らしや関わりの圏内で未知の事態や価値観に直面することが、これまでよりもずっと多くなり、社会全体において、先を予測することが、より一層難しくなっていくのは、もはや避けられないことでしょう。

そんな「これから」を生き抜く力を育むために、学校現場では今、「主体的・対話的で深い学び」の実現ということが掲げられています。教育実践の方向性として新たに示されたものですが、その目指すところの本質は、「自主・協同・責任」の校訓のもと、代々の先生方や同窓生の方々によって築き受け継がれてきた土浦一高の気風にも通底するものと感じます。

卒業生の一人として、改めて母校とそこに関わる多くの方々に対し感謝の思いを深くするとともに、未来の創り手である後輩の皆さんが、この伝統の上に、より新しい学びのあり方を通して、大きく、そして粘り強く羽ばたいていく力を得ていかれることを、心から願っております。

同時に、大きな変容の真っ直中にあって、これまでの枠組みだけにとらわれず、他者との協働や対話の中で世代や立場を超えて学び合うこと、変化と向き合い学び続けることは、私たち大人にこそ求められているとも思います。私も、もとより浅学菲才の身として模索と試行錯誤を重ねながらにはなりますが、しなやかさをもって様々な出会いを受けとめることの大切さを心に留めつつ、自分なりの道を歩んでいけたらと思っております。先輩方をはじめ同窓会の皆様には、今後ともご指導くださいますようお願い申し上げます。

結びにあたり、土浦第一高等学校及び進修同窓会の益々のご発展と、皆様のご健勝とご多幸をご祈念いたしまして、謝辞とさせていただきます。

卒業15周年記念同窓会「謝辞」

高57回　高原　和之

本日は、令和２年度進修同窓会総会及び卒業記念祝賀式にお招きいただき、誠にありがとうございます。またご祝辞と記念品を賜りましたこと、高57回生を代表いたしまして、心より御礼申し上げます。

さて、我々高57回は、卒業15周年を迎えることができました。平成14（２００２）年４月に入学し、平成17（２００５）年３月に卒業した学年になります。入学した平成14年の日本は、サッカーワールドカップの日韓共同開催に盛り上がりを見せており、私も日本代表の試合に一喜一憂していたことを、今でも鮮明に覚えています。

思い返せば、私たちの土浦一高での学校生活は、１年生の時には体育館が新しくなり、３年生の時には部室棟が体育館東側に新設されるなど、変化に満ちるとともに、素晴らしい教育環境の中で学ぶことができました。また、一高祭では、「進化・深化・真価」のテーマの下、趣向を凝らして多くのものを仲間と準備しました。級友とともに行なった教室の飾り付けや発表に向けて練習したＭスクエアなど、１つ１つが今でもかけがえのない思い出として残っています。

こうした沢山の思い出に囲まれた高校時代を送ることができたのも、偏に当時の先生方のご指導があったからこそだ、と思っております。学年主任の鈴木千尋、副主任池井芳則、Ａ組担任大塚健司、Ｂ組担任宮本順紀、Ｃ組担任大塚奈美子、Ｄ組担任原光広、Ｅ組担任増山道靖、Ｆ組担任飯竹修、Ｇ組担任山越好宏、Ｈ組担任柏正則など、３年生の時には、大変素晴らしい各先生方のご指導を受けることができました。今でも私たちは先生方の授業や、日常の何気ないやりとりなどを懐かしく思い出すことができます。本当にお世話になりました。そして、本日ご参会の諸先輩が、土浦一高の伝統を受け継いで来られ、発展させてくださったからこそ、私たちのかくも素晴らしい思い出に囲まれた高校生活があったのだ、と思います。重ねて御礼申し上げます。

最後になりますが、土浦第一高等学校及び進修同窓会のますますのご発展と、会員皆様のご健勝をご祈念申し上げ、謝辞とさせていただきます。

本日は、誠にありがとうございました。

旧本館校舎（重要文化財）内部補修工事について

旧本館校舎耐震補修工事が平成30年３月に完了しましたが、その後内部漆喰壁に一部盛り上がりが発生し、その状況報告が、茨城県教育庁財務課から６月30日と９月29日に学校側と同窓会正副会長他本部理事に対し行われました。それについては、左記のとおりです。

①経過

平成30年５月：漆喰壁のシワ・浮き発生を確認。その後、施工業者、設計管理業者（文化財建造物保存技術協会（以下「文建協」という。）が現地確認し、原因究明・対応検討のため、文建協から経過観察の調査（１年）の提案があり、文化庁が承認。

平成30年９月～令和元年９月：文建協提案により修理方法検討のため試験施工を実施。以後定期的に温湿度測定・破損範囲観察、同種施工の文化財現地調査・比較検討を実施。

令和元年９月：文建協から層出し調査の提案。

令和元年11月：層出し調査実施、その後文建協から最終報告書が提出され、文化庁と協議のうえ、令和２年３月に対応方針が承認された。

②現況

文化庁補助による保存事業では、現状保存とした漆喰壁に消石灰系仕上げ塗料により塗装したところで、修理事業完了後に壁表面にシワ・浮きが発生した。

③調査結果

破損原因は、耐震補強により軸部の強度が高まったことによって、補強前は見えない程度の微細な割れがあった弱い部分に力が掛かるようになったため、その後発生した地震の影響により既存の漆喰壁の割れが徐々に顕在化したものと推測。

④設計工事

上半期に設計、工事期間は、令和２年10月から令和３年２月まで行う。

恩師からの便り

飯村　弘先生（高5回）

（昭和46年4月～平成元年3月
平成12年4月～平成13年9月在職）

敷居の高い母校

社会科教師として15年目を迎えた私は、昭和46年4月、土浦一高に赴任しました。正直なところ、大変気の重い転勤でした。褒められるほどの生徒でなかった私にとって、母校土浦一高には、教わった先生方がまだたくさんいらっしゃったからです。

ご挨拶のため、恐る恐る職員室を訪れるや否や、不安は早くも現実のものとなりました。国語科の諏訪（旧姓百橋）正次郎先生がにやにやしながら近づいて来て、「飯村君、しばらくだね」と言葉を掛けてきたのです。そして「ちょっと待っててね」と言い、机の引き出しの奥の方から、何やら帳簿のような物を取り出して来ました。埃を払い頁を繰って「フムフム」と頷かれただけで、何もおっしゃらず古い閻魔帳を元に戻されました。これで効果は十分でした。後で聞いた話ですが、かつての教え子を当時の閻魔帳で脅かすのが、諏訪先生の楽しみの1つであったそうですが、この件は、私にとっては不幸中の幸いでした。高校時代、国語は比較的好きな教科だったので、成績もそれほどひどくはありませんでした。これが数学や物理などであったら、大変悲惨なことになったと思います。幸い、数学を教わった稲見敏雄先生（教頭になられていた）や物理の横田尚義先生には、こんな悪趣味（？）が無くて助かりました。苦手な物理を持て余していた私を心配して、「単位を落とさない程度の勉強はしておけよ」とかけられた言葉を今でもはっきり覚えています。成績は推して知るべしです。

しかし、懐かしい恩師の存在は、大変心強いものであったことも確かです。母校のありがたみも同時に痛感しました。

土浦一高の生徒会

本校で最初に担任したのは、昭和47年入学の1年G組でした。偶然かも知れませんが、リーダーシップに富む猛者揃いのクラスでした。多くの中学校の生徒会長経験者が集まっていたのです。従って、ホームルーム活動などは極めて活発でした。反面、自信を失い、悩みを抱く生徒も出てきました。ある地方の中学校出身で生徒会長の経歴をもつH君から、「僕は土浦一高でも生徒会長をやる。その自信もあると思い、一高に入学した。ところが、クラスには想像もできない優秀な輩がごろごろしている。とても太刀打ちできる相手ではない。すっかり自信を失ってしまった」という相談を受けたことがありました。

この当時、大学紛争の影響が地方の高校にまで及んできていて、本校の生徒会もかなり先鋭化していました。各クラスの代表で構成された評議員会は、毎週火曜日の昼休みに定例化され、生徒会顧問でもあった私も会議に臨みました。評議員会の面々は、学校に対する対抗姿勢（つまり、体制批判）が強く、彼等との話し合いには苦労しました。このような生徒会に、1年生のクラス代表たちは疑問を持ち始め、生徒会本部への関わりを深め、改革へ向けた活動を行うようになりました。こうした動きで土浦一高の生徒会は徐々に変わっていきました。昭和54年から始まった共通一次試験への対応でも、本校生徒会は賢明な判断をしました。というのは、共通一次試験は1月に実施されることになっていたので、これまでのように一高祭を9月にやっていたのでは、試験への対応が遅れます。何せ、長期の夏休みをフル活用して一高祭の準備に充てているのですから、本格的な受験態勢に入るのは、一高祭が終わった10月からとなってしまいます。ただ、問題がありました。1つは、例年5月に実施してきた水戸一高との定期戦・交歓会です。一高祭を6月にもってくると、5月の定期戦・交歓会は日程的に無理です。もう1つは、一高祭への準備期間が極めて短くなってしまうことです。特に、入学したばかりの1年生にとっては厳しいものです。学校側が提案した【一高祭6月案】について、生徒会との話し合いが何回ももたれ、結果、生徒会の理解を得て、一高祭の6月開催が決まりました。

ラーメン屋が一高の教師に

土浦一高という恵まれた環境で長く教師を続けていましたが、時折、教師とは全く違う仕事をしてみたい、という衝動に駆られることがありました。

冗談半分でしたが、「定年後は、おでん屋のような仕事をやりたい」というようなことを生徒に話したことがあります。

昭和47年入学生の3年次には，文系クラス3年C組の担任を命ぜられました。グラウンドに面した粗末なプレハブの部屋がホームルームで、野鳥が自由に出入りする，のどかな教室でした。勉強よりは余計な事（クラス活動の記録映画づくりなど）に没頭していた、遊び心豊かな生徒たちの多いクラスでした。彼等・彼女等（27回生）は卒業後もよく拙宅を訪れてくれました。そして、思い出したように、「おでん屋開業はいつになりますか」などと聞いてきます。「そのうちに……」と曖昧な返事。こんな遣り取りが数年続きました。内心、できっこない事だと思っていました。

でも、転機は突然訪れるものです。銀行を脱サラしてラーメンのチェーン店を経営していた義兄が交通事故で急死したので、妹である私の妻が急遽後を引き継ぐことになってしまいました。各チェーン店にはそれぞれ独立してもらいましたが、本店だけは妻が係わることになったのです。勿論、妻だけに押し付ける訳にはいかない、と私も携わることになりました。おでん屋ではなくラーメン屋ではありましたが、夢は現実のものになった訳です。仕事は想像以上に厳しいものでした。それと、これまで体験したことの無い人間関係に戸惑いもしました。しかし、毎日体全体を使って働く充実感は、これまでには味わったことの無い心地よいものでした。27回生3Cの卒業生たちが馳せ参じて、転職祝いをしてくれたのも嬉しい思い出です。

店の仕事にも慣れ、常連のお客さんも増え、営業が軌道に乗った頃のある日の夕方、数人の若者たちが客として店に入って来て、カウンター席に着きました。そのうちの1人が、たまたま厨房に居た私をまじまじと見つめているのに気が付き、よく見ると一高の卒業生でした。「おゝ、K君じゃないか!!」「やっぱり先生だったんだ。驚いたなー!!　先生によく似ているとは思いましたが、まさか……」こんな遣り取りから、今は、筑波大学で医学の勉強をしていること、同じ医学科の仲間と土浦に来た帰りであることなど、ラーメンを啜りながら話が弾みました。K君は私が学年主任だった時の生徒（38回生）でした。かつての師弟のこんな会話に、一番驚いたのは、連れの友人たちだったと思います。後でK君がどう説明したかは分かりませんが……、私には何とも愉快な出来事でした。

4年ほど続けてきた商いでしたが、店舗の老朽化を機に店を閉めることにしました。建て替えまでして商売を続けるには歳を取り過ぎていましたし、ラーメン屋稼業も十分に堪能しましたので。

これからはのんびりと海外旅行でもしよう、などと考えていた矢先に、土浦一高の長瀬宗男校長先生から、講師依頼の電話を頂きました。軽い気持ちでお引き受けしてしまいましたが、一高での授業をするにはブランクがあり過ぎました。後悔しましたが、約束をしてしまった以上、もう後戻りはできません。

久しぶりに教壇に立った瞬間、約10年間のブランクは消え失せ、かつての教師になっている自分を感じました。長年続けてきて体で覚えた（？）ものは、そう簡単に失うものでは無いと知りました。1年半という短い期間でしたが、一高での講師としての授業は本当に楽しいものでした。毎日が充実していました。最終授業を旧本館の復元教室で行わせていただきましたが、私の教師生活には勿体ない幕引きの舞台でした。

「学校の教師がラーメン屋になる」というのは珍しいことだが、あり得る話だ。だが、**「ラーメン屋の親父が一高の教師になる」**など聞いたことがない。と、一高か二高の若い教師たちの間で語られていたとか……。

卒業生レポート

私の卒業後50年

長南　達也（高23回）

高校時代―久保先生との出会い

私の土浦一高との関わりは、久保隆司先生との出会いから始まった。それは昭和43年、私が15歳で土浦一高に入学した時に遡る。先生は黒板に「邂逅」という言葉を書かれ、生徒一人一人と握手をして回られた。その後3年間担任としてお世話になり、人生の師と仰いだ。現代国語の授業を通し、文学、社会、人生について多くを学んだ。先生は、ご自分の意見を押しつける事なく、いつも私達にどう思うかと問われた。

2年に1度のクラス会では「君達の誤字・脱字だらけの年賀状を添削するのが楽しみだ。出来の悪いのは責めないが、私より先に死ぬ事だけはしてくれるな」と云われるのが口癖だった。先生は平成19年に他界された。

浪人して医学部に進路変更

最初の大学受験は甘く見て勉強せず失敗した。父（長南武夫、昭和20年・土浦中45回）は理学部から医学部に進路を変更するなら浪人しても良いと言った。それもいいかと思った。当時、工場からの排煙、廃液による公害が社会問題になっており、理系に進むと加害者になりかねないと考えたのである。

2学年が1クラスに

東北大に入学してひと月で学生ストライキがあった。国立大の授業料が月千円から3千円になったのを3倍の値上げで不当だとして学生達は抗議したのである。現在の学費（月約4万5千円）を考えると夢のようである。私の1年上のクラスは期末試験をボイコットした結果、1年後の学部進学をほぼ全員落第することが決まっていた。かくして医学部の4年間、2学年分約2百名のクラスで卒業するまで過ごした。出欠など取らない昔のことで、講義出席率は3、4割だったように思う。同級生が倍いることは後にプラスに働いた。

下町の病院で初期研修―佐藤信英先生との出会い

初期研修は東京大田区の大田病院で行った。指導医も30―40代と若く溌剌としていた。中でも影響を受けたのは、呼吸器科の佐藤信英先生である。先生は、16歳で結核を発病し、15年の療養の末、32歳で大学検定試験に合格し、東京医科歯科大を主席で卒業された。私が感銘を受けたのは、心の強さも然ることながら、先生の学識の深さとそれを支える読書量の多さとである。先生のカバンの中には、いつもニューイングランドジャーナル（NEJM）をはじめ世界トップクラスの医学雑誌が詰まっていた。私は、先生に感化され、眠っていた学問への興味を呼び覚まされた。

大学での研究生活

卒業後3年、東北大第一内科での研究の日々が始まった。専門は呼吸器内科学で生理グループに属し、呼吸リズム形成の仕組み、呼吸困難感発生の機序、睡眠時無呼吸症候群の病態などを研究対象とした。朝から病棟回診、検査、外来などのデューティをこなし、午後3時頃から実験を行なった。症例検討、抄読会、研究カンファランスなどに加え、暇さえあれば研究テーマについてディスカッションした。海外からの研究者の訪問も多く、東京を飛び越して世界と繋がっているという矜持を皆が持っていた。

身分は当初「医員」というもので、1年毎の雇用で同期入局7名に対し1名分しか席がなく、医療過疎地域の病院へ毎月3泊4日のアルバイトに行って生活費を稼いだ。こうしたアルバイトによって僻地の医療も半面支えられていた。

家族を連れ留学

1985年から2年間、妻と2人の子供を連れて米国留学した。滑り出しは多難だった。日航ジャンボ機が墜落したひと月後、JALでニューヨークに飛んだ。何も知らない1歳の息子は、機内を走り回ってビジネスマン達から苦情を言われ、制止するのに疲れ果てた。13時間のフライトでニューヨークに着いた後、目的地のクリーブランド便は、出発まで7時間待ちだった。親達がぐったりしている時、5歳の娘がしっかりと弟の手を握っていてくれたおかげで、息子は迷子にならずに済んだ。空港に迎えの人はいなかった。タクシーで宿に向かったが、部屋は予約してなかった。ホテルの支配人の厚意で宿を得た。

滑り出しはトラブル続きだったが、あとは次第に良くなった。ボスから何をしたいか聞かれ、私は2つの研究プロジェクトに組み入れられた他、技師を付けてもらい新たなプロジェクトを始動する事となり、オフィスと実験室とをあてがわれた。研究について、毎週教授と直接ディスカッションできるのは、日本では考えられない事で、毎日5時に帰り、週末は買い物や旅行をしても、研究は進捗し、9編の論文と教科書の1章に結実した。

英語の読み書きは何とかなったが、リスニングと会話力の低さは明白だった。毎晩NNCニュースを見た。40分毎に内容をアップデートしながら繰り返すので、反復して聞けた。家族の中で会話習得が最も早かったのは娘で、キンダーガーテン（日本の幼稚園年長に相当）に新学期から入れた。宿題は、図書室から毎日、本を1冊借りて親の前で音読してくる事で、一緒に読んで英語の初歩を学んだ。娘は、友達も早くでき、1年足らずで、先生から英語は完璧と褒められた。親はそうはいかなかったが、家や中古車の頻繁な修理の経験から交渉力は少し付いたようである。

逆カルチャーショック

米国での研究生活が順調だった分、帰国後は年功序列や非効率に苦しんだ。国際シンポジウムの事務局を2年続けて担当するなど、研究に関する仕事の他、雑用も増える一方で、ついに私は、大学を辞し郷里に帰って開業する事を決意した。父は開業を歓迎するどころか「おまえにラーメン屋はやれないだろう」と言った。私も「ラーメン屋にはならないよ」と返し、それきりとなって30年が過ぎた。短慮・性急な決断であり後悔した。本当に自分のやりたい事は何か熟慮すべきであった。

方針転換し、日鉱記念病院で呼吸器を専門としつつ内科全般に通じた医師を目指すと決め、呼吸器専門医の他に綜合内科専門医の資格を得た。NEJMを座右の書とし、勉強する姿勢は忘れまいと思った。タイミング良く、歯学部生に3年間、内科学を教える機会に恵まれ、自身にとっても知識の整理、更新となった。

ライフワークとの出会い

2001年、私はIT産業の基礎を担う素材メーカーN工場の産業医となったが、同工場でインジウム化合物の製造に従事していた20代の労働者が間質性肺炎で死亡し、主治医は職業性疾患の可能性を示唆した。そこで、我々は産業医として職場巡視・衛生講話を行った上で、呼吸器検診を実施した。会社側も積極的で、社長は因果関係を科学的に明らかにしてほしいと表明し、工場としても作業環境改善のためのプロジェクトを立ち上げた。検診の結果、血中インジウム濃度と肺障害との間に密接な関連が見出された。早速論文を書いて投稿したが、欧米ではあまり知られていない物質による新しい疾患のためか、最初の論文が欧州呼吸器ジャーナルに受理されるまで、3年以上を要した。

それ以後は認知度も増し、10編余の論文を送り出した。環境改善の効果も経年検診の結果から裏付けられ、法制化に結びついた。インジウム肺の発見、病態生理の解明、管理は私にとってライフワークとなりそうである。

稿を終えるにあたり

好きな研究を自身の短慮から投げ出したが、学問の神様はもう1度チャレンジする機会を与えてくださった。最近は呼吸器病学を志す若手医師達と論文についてディスカッションするのが喜びである。

（特定医療法人社団　日鉱記念病院院長）

支部・ＯＢ会だより

高津天川支部

宮本　幸男（高15回）

吉井正泰（高６回）・吉井注射器社長であった大先輩から、平成５年か６年かに引き継ぎ、早20年余りになるので、高津天川支部そのものは、かれこれ40年余りになるかと思います。支部は、古い歴史をもつ土浦市立下高津小学校管内の上・中・下高津と、上高津の一部から発展した天川の地区の会員で構成されています。天川地区は身近であり、新住民という壁もなく、昔から協同体として一緒に行事等を行ってきました。会の規約は、昭和53年に施行されています。その２、３年前から常磐線グループが帰り際に「土浦赤チョウチン街」で一杯やりながら、まとめたものです。併せて吉井さんに設立会長をお願い、会が発足しました。

会と言っても「暑気払い」と「忘年会」とが中心で「沃野一望」を歌って２次会に散っていくことがパターンでした。組織の存続には、お金も必要ということに段々なり、機関誌を発行して会費を集めようとして、会誌『進修天川』の編集委員会も作り、原稿と協賛金を集め発行に至りました。当初考えた飲み会からレベルも上がりました。これも土浦一高という土壌があったからであり、我々は誰のための同窓会であるべきか、ということにも心がけて来ました。現役の頃は、仕事上の繋がりも考えられましたが、それは個人的関係として深入りしなかったのが、長続きの秘訣だと思います。昨年、会誌40号を発行し、毎年校長先生から、一高の近況等の玉稿を頂き、高校時代を偲びながら読ませて頂いております。また会員の横顔のページがあって、芳名、住所、電話番号、趣味、心がけている事等を、本人の了解を得て、掲載し横の連絡も可能としております。特に心がけている事の欄は、自分の現在にとっても大変参考になるページだと思っています。

私も卒業してから60年近くなりましたが、昨年３年時の担任、鶴巻先生（元水戸一高校長）をお迎えして、クラス会を開催し大変盛り上がりました。皆さんも是非開催してみてはどうでしょうか。若い時代に戻って楽しいものでした。我々の世代は同窓という一言で、率直にあの青春時代に戻れるものです。

支部総会は12月上旬で形通りの議題はありますが、忘年会が中心となっております。年間行事としては、ゴルフコンペとバスハイクを行っております。バスハイクの場合には配偶者同伴可となっていますが、お一人様の場合は、他のツアーグループと仲良くなり、ビールを飲みながらのカラオケ大会がバスの中で開催され、我々の持参した差し入れが賞品となります。日帰りですので、銚子とか奥久慈とか毎年同じ場所ですが、温泉に入り昼食を摂り帰りのバスの中は「グウグウ」です。コンペは最近老齢化により２組程度となりましたが、会の予算から優勝者には賞金が出ますが、結局は祝勝パーティーの寸志となります。若い世代にも是非ご参加頂き、ワイワイ、ガヤガヤとやりたいと思っています。

時々一高の校門の前を通り、車を寄せることがあります。３年時の教室は、正面玄関の隣で文化財として保存されております。懐かしさも込み上げ、若かった青春時代を思い起こす今日この頃です。

犬吠埼での記念写真　平成26年11月2日

東進会支部

飯塚　哲哉（高18回）

進修同窓会東京支部が、「東進会」と呼ばれるようになったのは１９９０年（東進会 HP https://to-shin-kai.jimdo.com）。今年は30周年を迎えますが、やはり新型コロナウイルスによって、その活動は大きな影響を受けています。毎年６月に、在校生のご協力も得ながら学士会館で開催される総会が、今年はコロナ禍を避けるために、急遽オンラインにて開催されることになりました。

遡れば、進修同窓会東京支部会が東京丸の内倶楽部にて再開されたのが、サンフランシスコ講和条約締結の直後だと言われますが、その長い歴史と伝統の中でも、当然初めてのことです。

東進会は、１都３県（神奈川、埼玉、千葉）在住で東京勤務等の縁を有するＯＢ・ＯＧを会員とし、６月の総会、企画委員会を軸に、謳粋会、アカンサスクラブ、ゴルフ部、などの活動をしております。

東進会において最も頻度高く活動しているのが**謳粋会**で、篠田会長時代の１９９８年９月14日に玉淀で開催されたのが第１回。その後やや庶民化路線を歩むようになりましたが、毎月第２木曜に開催され、今年の２月13日の謳粋会は、なんと第２５８回を迎えました。20代から80代の幅広い世代のＯＢ・ＯＧが集い、選び抜かれた日本酒を持ち込み、蘊蓄を傾けます。前任の若山宏謳粋会会長（高13回）から引き継いだ新会長廣瀬巳良氏（高17回）が中心となり、開催前月に場所や料理を検討しながら活動しています。今年はコロナ禍のために、３月以降開催を見合わせています。

アカンサスクラブは、３月・９月・12月に開かれる講演会と懇親会をセットにした異業種交流会的な集いです。現進修同窓会会長（前東進会会長）の大野金一氏の発案で、花上克宏氏（高27回）が実行委員長となり、活発な運営がされています。２０１４年４月16日に第１回を開催し、昨年12月５日に第17回を数えました。謳粋会はややベテラン世代が多いのに対し、アカンサスクラブは現役世代の参加も非常に多く、ビジネス論議にも花が咲き、土浦一高ＯＢ・ＯＧの多彩さを実感できる集いです。今年３月はコロナで中止となりましたが、９月３日のアカンサスクラブは、オンライン講演会として開催されました。

東進会ゴルフ部の活動も、１９９２年11月26日の第１回開催から28年の歴史をもち、毎年１回、土浦一高ＯＢ・ＯＧゴルフ会とも連携しながら、東筑波ＣＣ、筑波東急ＧＣ、カメリアヒルズＧＣなどで、６～７組で開催されています。今年はやはりコロナ禍のために、５月に予定されたゴルフ会は中止となりましたが、ベテラン達のパワフルなプレーは、まさに１００歳人生時代が到来しつつあることを実感させてくれます。

これらの定期的な活動の詳細や改善、新活動の提案などを議論するのが小野幹夫（高23回）副会長を中心とした**企画委員会**です。今年も新たに加わった若い世代から新提案が幾つも出、検討され実行されようとしています。

昨今の世界規模での環境変化は、益々高速化し、激しさを増しています。例えば、米国発のスマートフォンが誕生から未だ10年前後にも拘わらず、既に成熟の兆候をみせていますし、技術立国と言われた筈の日本のデジタル活用の立ち遅れ、米中関係の深刻化など、まさに激動の道を歩んでいます。こうした世界を乗り切り、より味わい深いものにして行くためには、同窓の仲間の知恵を共有し継承できるかが大切です。これからもより多くの皆様のご参加とご協力をお願い申し上げたいと存じます。

五十嵐つくば市長（平9年卒、上左）、青山衆議院議員（平9年卒、上右）が講演したアカンサスクラブ風景

母校だより

附属中学校開校

教頭　中島健一郎

本校は、令和３年４月に附属中学校を開校し、中高一貫教育校として新たな道を歩み出します。附属中学校は、１学年２クラスで80人、令和５年度には全学年で２４０人となる予定です。附属中生は、令和６年度より土浦一高に進学します。

これまで、土浦一高が一貫してこだわってきた「一高スタイル」の追求というスピリッツを継承しながら、この歴史的な変化を主体的にとらえ、更なる飛躍を成し遂げる学校となるよう努めてまいります。土浦一高のよき校風を継承・発展させるため、Global Learners Projectを策定し、「人とつながる・知とつながる・社会とつながる」を合言葉に、多彩で進歩的な取組を計画中です。日々の学習、部活動、学校行事に附属中生がコツコツ取り組むとともにトコトンやり抜くことを通して、多様性が織りなす社会に貢献できるトップリーダーとしての資質・能力を身に付けるものと確信しています。

進修同窓会の皆様には、今後ともなお一層のご指導ご支援をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

土浦第一高等学校附属中学校案内パンフレット

探究学習発表会

２年Ｈ組　大住　桜子

私たちは１年生の間、班で決めた研究テーマに取り組む探究学習を行ってきました。初夏、まだあまり話したこともなかった班員と研究テーマを話し合い、お互いに敬語のまま役割分担を進めたことは今でも懐かしく思い出されます。週に１度の授業の中で、研究を進めたほか、夏休みには土浦一高生や地域の方々へのアンケート、大学など専門機関への訪問といったフィールドワークを行いました。このころには班員のことが分かりはじめ、それぞれの長所を生かし、短所を補い合いながら活動を行うことができました。秋にはフィールドワークで得た結果の解析を進めました。クラス内での小さな発表会を経てついに１月26日、探究学習発表会の日がやって来ました。この発表会は同級生、先生方、保護者の方々、さらには地域の方々に向けて研究の成果をポスターセッションで報告するというものでした。各班が丹精込めて作り上げたポスターが壁一面に並び、通路は人でいっぱいになりました。２人１組となった私たちは、互いに歩調を合わせ、来場者一人一人の様子を見ながら発表しました。そこでも質疑応答の時間には、調査不足や工夫の不足を知らしめられることもありました。何度も発表し、来場者の方々とのコミュニケーションをとる中で、私たちは少しずつよりよい発表の仕方を習得することができました。この日の午後には、探究学習の継続を選択した２年生の発表を聞きました。２年生の発表は、はっきり理論立てられた内容と、人を惹きつけ円滑な理解をもたらす話し方とでたいへん分かりやすく、私たちは大きな衝撃を受けました。

１年生での探究学習において、最初から最後までスムーズに研究を進められた班はおそらく１つもなかったことでしょう。しかしその数々の困難を乗り越えた今、委員会活動や部活動の中枢を担うこととなった私たち２年生は、互いに支え合いながら自信を持って前進できているように感じています。

部活動報告

野球部

３年Ｄ組　先崎　大空

硬式野球部３年生は、７月12日夏季大会を最後に引退をしました。

１２２代目となるチームは、大会、練習試合において結果を残すことが出来ず、力不足を痛感させられてのスタートでした。自分たちが躍進するために何が必要か、部員一人ひとりが野球に対し真剣に向き合いながら日々の練習に取り組み、ひと回りもふた回りも成長できていることを実感した矢先、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言を受け、学校の部活動の休止が突然決まりました。そのような中でも夏の大会が行われることを信じ、気持ちが途切れないよう互いを鼓舞してきました。代替大会となった夏季大会は結果を残すことが出来ませんでしたが、このような状況の中で大会が開催されたことに感謝しています。沢山の方々の支えがあって野球が続けてこれたことを改めて実感することが出来ました。これまでの応援、本当にありがとうございました。

来年の夏には新型コロナが終息し全校応援の中、プレーできることを祈ります。今後も硬式野球部のためにご指導をよろしくお願いします。

夏季大会に向けての集合写真

合唱部

3年D組　有本　悟

合唱部には、コンクールや各コンサート、一高祭、定期演奏会など様々な活躍の場があります。ジャンルを問わず、全員で歌をつくりあげる素晴らしさに魅了されている部員ばかりです。

そんな中、今年の3年生は、集大成の場である3月の定期演奏会と六月の一高祭が、新型コロナウイルスの流行によりなくなってしまいました。引退の場を失い、どうしようか部員で話し合った結果、関係者だけのコンサートを開催したいという意見にまとまりました。

コンサートには家族や先生方が来てくださり、満足のいく引退公演ができました。演奏できる機会ができて本当に嬉しかったですし、コンサート実施が全国的に難しかった7月に、開催にご尽力くださった先生方には感謝しております。

これからも、支えてくださる方々への感謝を忘れずに、今できる最高の演奏をし続けられる合唱部でありたいと思います。

サマー・コンサート

定時制の活動

教頭　新堀　隆久

今年度は37名の生徒たちが新たに定時制に入学しました。入学式を終えた翌日から、コロナ禍により6月の第1週まで臨時休業を余儀なくされ、新入生にとっては高校生になったという実感がなかなかもてないまま、約2ヶ月が経過しました。また、当初予定されていた定時制通信制体育大会は6月、10月とも中止、11月の星光祭（文化祭）も中止、5月の校外学習も中止となり、日頃の活動の成果を発表する場、親睦を深める場が少なくなってしまいました。しかし、生徒たちは、臨時休業中も学校から出された課題にしっかり取り組み、登校日には元気な姿を見せてくれました。約半数の生徒が昼間はアルバイトをしており、今般のコロナ禍の影響を受けた生徒も少なからずいたようですが、そのような状況下においても、学校へのモチベーションを維持し、日々さまざまな工夫をしながら生活していた様子が窺えました。学校再開後も、授業や部活動に熱心に楽しく取り組む姿が多く見られます。学校のさまざまな活動を通して、多様な人々と関わり、幅広い見方や考え方に触れ、一人ひとりが充実した学校生活を送ることによって、人間性を高め社会の一員としての資質を向上させていくものと考えます。定時制の生徒たちは、このコロナ禍をバネとして大きく飛躍してくれるものと信じています。

◆定時制文庫◆

本館2階の定時制教室前のロッカーの上には、所狭しとさまざまなジャンルの書籍が並んでいます。学校図書館の現状に関する調査（文部科学省）によると、高校生の2人に1人は本を読まなくなっているそうです。少しでも生徒が活字に触れる機会を増やしたいという願いから、数年前から谷口教諭を中心に少しずつ蔵書を増やしてきました。現在の蔵書はなんと900冊に上ります。人が一生をかけて見たり経験したりできることには限界がありますが、読書を通して、著者が長い時間とたくさんのお金をかけてしたことや考えたことを、ごく短い時間で追体験できることが読書の大きな魅力です。恋愛小説、ホラー小説からエッセイ、ノンフィクションまで、多様な本が並んでいるので、生徒の興味関心に合致する本がきっと見つかるはずです。中でも一際目を引くのは、その書籍を収納している本棚です。これは、定時制の大先輩、茨城県ものづくりマイスターでもある土浦の工房尾張屋会長櫻井光孝さんがご厚意で製作してくださり、進修同窓会定時制部会から後輩へと昨年11月に寄贈していただいたものです。良質の檜を使用しており、木のぬくもりや優しさが感じられる本棚です。今後も大切に使用していきます。

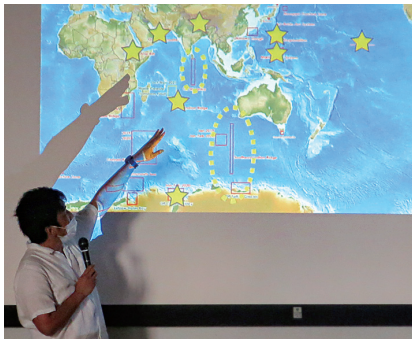
定時制文庫

◆社会人講話◆

定時制では、一昨年度より年複数回の社会人講話を実施しております。今年度第1回目6月27日、本校の卒業生で、国立極地研究所・総合研究大学院大学助教の藤井昌和氏（高59回）を講師としてお招きして実施しました。「海と地球の科学が向き合う21世紀」と題して、南極観測や深海調査の仕事の一端を、スライドや映像をふんだんに使って紹介していただきました。海底6千メートルの泥を採取して調べると30万年前の様子が見えてくることなど、専門的で貴重なお話に生徒たちは興味深く聴き入っていました。最後の質疑応答では、「なぜしんかい6500のような潜水艇をもっと作らないのか？」、「海底から噴き出すお湯でエビは死なないのか？」、「海水汚染などで南極のサンゴ礁はあとどのくらいで消えてしまうのか？」など、素朴な疑問や鋭い質問が生徒から出されました。藤井さんは高校時代、将来の夢が漠然としている中、「まだ何もない。けど何かを見つけたい。」と思いながら生活していたそうですが、「真剣に取り組めば、いつか何かが見えるはず。」と、何事にも真剣に取り組むことが重要だということを教えていただきました。

今後も定時制では、生徒のキャリア支援を念頭に置き、自己肯定感を高め、多方面に見識を広げるため、様々な分野の社会人の方を招いて講話を行う予定です。

藤井昌和氏による社会人講話（1）


藤井昌和氏による社会人講話（2）

進路状況報告

東大26名（公立全国４位）
京大８名
筑波大32名　東北大14名
国公立大医学部医学科５名

進路指導部長　浅野　武雄

今年が最後となったセンター試験においては、大学共通テストを意識した出題も見られた。志望動向に影響が大きい平均点は、数英の主要教科でダウンした。特に英語（筆記＋L）がマイナス10点、数学ⅠA・ⅡBマイナス12点と大幅にダウン。そのため国公立大への志願が例年に比べ減少した。特に難関大を除く国立大で減少が顕著であった。

また、来年から共通テストが始まることから、現役合格を意識した心理により、例年以上の安全志向がみられた。特に近年難化をみせていた都市部私立大を敬遠する動きが鮮明であり、私立大では14年ぶりに志願者が減少している。

ここ数年、都市部を中心とした私立大学難化の要因となっていた入学定員管理の適正化は、多くの大学で昨年までに終えている様子が見られた。そのため今春は、合格者数の増加傾向になった。

また、理高文低の傾向が見られ、理工系の人気が高まっている。

本校の合格状況については表のとおりである。国立難関大学の合格者数は、北海道大３名、東北大14名、東大26名、東工大４名、一橋大１名、名大１名、京大８名、阪大９名、九大１名と合計67名であった。その他で合格者の多い大学は、茨城大19名、筑波大32名、千葉大13名となっている。

次に医学部医学科については、国公立大合格者数は、旭川医科大１名、北海道大１名、弘前大１名、筑波大１名、徳島大１名の５名であった。国公立大以外では、防衛医科大１名を含む14名の合格があった。

また、新卒生の国公立大合格者数は１２８名。現役進学率は66・６％となり、本校としては、２年連続の高い進学率となった。

本校の生徒が受験する大学には、難関大といわれる大学が多く、目標を高く設定し、最後まで諦めない生徒の姿勢が窺える。しかしながら、本校を取りまく環境変化は急激に進んでおり、今後一層の学習指導・進学指導の充実を図っていかなければならない。

令和2年度入試合格状況

国公立大学

大　学	合格者	新卒
旭川医科	1	
帯広畜産	1	1
北海道	3	3
弘前	1	
東北	14	9
秋田	1	
茨城	19	17
筑波	32	28
群馬	1	1
埼玉	2	2
千葉	13	9
お茶の水女子	3	3
電気通信	2	1
東京	26	14
東京外国語	3	2
東京学芸	5	2
東京工業	4	3
東京農工	4	2
一橋	1	
横浜国立	5	4
新潟	1	1
金沢	1	1
信州	3	
名古屋	1	1
京都	8	6
大阪	9	5
神戸	1	
広島	2	2
山口	1	
香川	1	
徳島	1	
九州	1	1
茨城県立医療	1	1
東京都立	3	1
横浜市立	1	1
新潟県立	1	1
長岡造形	1	1
都留文科	1	1
静岡県立	3	2
岐阜薬科	1	
大阪府立	2	2
国公立合計	185	128

私立大学

大　学	合格者	新卒
青山学院	23	16
学習院	9	7
慶應義塾	21	8
国際基督教	1	1
芝浦工業	31	12
上智	9	5
中央	25	12
東京女子	12	8
東京理科	90	43
日本	23	11
日本女子	17	14
明治	65	36
法政	48	25
立教	23	15
早稲田	46	25
同志社	6	6
立命館	3	2
その他	246	129
私立大学合計	698	375

大学校

大　学	合格者	新卒
防衛医科	1	
防衛	1	
大学校計	2	

医学部医学科

大　学	合格者	新卒
旭川医科	1	
北海道	1	1
弘前	1	
筑波	1	1
徳島	1	
防衛医科	1	
東北医科薬科	1	
国際医療福祉	1	
獨協医科	5	
埼玉医科	1	
杏林	2	
昭和	1	1
順天堂	1	
東京医科	1	
医学科計	19	3

職員室だより

芸術科より

美術　関谷　隆志

授業は美術と関係のない「つまらない話」からいつも始めるようにしています。本県の未来を牽引する事になるであろう若者たちには、学校では学ばない様々な事象に対して、広く興味を持って欲しいと考えています。

美術の授業（１年デザインの学習）

音楽　竹原　慈美

様々な場面で生徒と日々を共にする中で、何事も全力で取り組む生徒の姿は、私のエネルギーになっています。

授業で扱うのは、幅広い内容・多様なジャンル。どんな子にも、授業が自身の中で少しでもプラスに働くようにと考えています。学んだ「音楽」や「芸術」から、自分なりに没頭できるものを見つけ、音楽や芸術が寄り添う日々を送ってほしいと願います。

創作〔作曲〕の授業

会費納入へのご協力のお願い

平成31年度会費納入状況は、２，２１０名の皆様方から７，３４２，０００円を納入していただきました。会費は、各事業項目に充てられますので、ご協力よろしくお願いします。

進修同窓会規則（抜粋）

第12条　本会の経費は第10条の入会金、年会費、終身会費及び篤志寄付金を以て充てる。

一、年会費は、６年目以降は、３千円以上とする。

二、終身会費は、３万円以上とする。

住所変更手続きのお願い

住所や電話番号等を変更された方は、左記のEメールへ送信下さい。又同窓会会員名簿の不明者欄に掲載されている知人や友人がおりましたら、当人に事務局へ連絡するようお伝い頂きますよう、御協力よろしくお願いいたします。

進修同窓会事務局
Eメール　shinshu@tsuchiura1-h.ibk.ed.jp
FAX　０２９（８２６）３５２１

平成31年度　進修同窓会決算書

収入総額　11,839,299円
支出総額　8,946,875円
差引残額　2,892,424円（次年度へ繰越）

【収入】　単位：円

	項目	予算額	決算額	比較増減（△）	備考
1	繰越金	2,832,285	2,832,285	0	前年度繰越金
2	終身会費	60,000	60,000	0	2名
3	年会費	7,000,000	7,282,000	282,000	2,210名
4	入会金	1,750,000	1,645,000	△ 105,000	新会員　計329名×5,000円
5	繰入金	0	0	0	
6	寄付金	0	20,000	20,000	
7	雑収入	715	14	△ 701	預金利息
	合計	11,643,000	11,839,299	196,299	
	ご寄付者名	高22回卒吉波弘氏			

【支出】　（残額欄の△は決算額が予算額を超過していることを示す。）

	項目	予算額	決算額	残額（△）	備考
1	総会補助	400,000	309,183	90,817	総会資料、会場設営等
2	会報発行費	3,400,000	3,097,000	303,000	会報印刷、発送
3	通信費	400,000	54,571	345,429	切手、はがき
4	卒業記念品費	250,000	218,460	31,540	卒業証書ホルダー
5	卒業周年記念品費	500,000	500,000	0	卒業周年記念品積立
6	会議費	400,000	253,448	146,552	役員会、評議員会経費
7	支部連絡費	400,000	260,000	140,000	支部会補助
8	生徒奨励費	1,200,000	1,100,000	100,000	生徒会補助
9	生徒活動補助費	800,000	346,004	453,996	各部活動用品
10	別途積立金	1,000,000	1,500,000	△ 500,000	別途積立金会計へ
11	慶弔費	100,000	16,240	83,760	生花
12	事務局費	1,000,000	891,168	108,832	担当者手当、郵便振替手数料等
13	旧本館活用事業費	920,000	400,801	519,199	事務用品・旧本館公開経費
14	海外研修旅費	600,000	0	600,000	
15	予備費	273,000	0	273,000	
	合計	11,643,000	8,946,875	2,696,125	

上記のとおり決算しました。
令和2年3月31日
茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長　大野　金一

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。
令和2年3月6日

監事　高山　了　㊞
監事　助川博夫　㊞
監事　杉山　博　㊞

令和２年度　進修同窓会予算書

収入総額　11,703,000円
支出総額　11,703,000円
差引残額　0円

【収入】　単位：円

	項目	予算額	前年度予算額	比較増減（△）	備考
1	繰越金	2,892,424	2,832,285	60,139	前年度繰越金
2	終身会費	60,000	60,000	0	
3	年会費	7,000,000	7,000,000	0	
4	入会金	1,750,000	1,750,000	0	350名（全320・定30）×5,000円
5	繰入金	0		0	
6	雑収入	576	715	△ 139	預金利息
	合計	11,703,000	11,643,000	60,000	

【支出】

	項目	予算額	前年度予算額	比較増減（△）	備考
1	総会補助	400,000	400,000	0	資料、会場設営等
2	会報発行費	3,400,000	3,400,000	0	会報印刷、送料
3	通信費	400,000	400,000	0	切手、はがき等
4	卒業記念品費	250,000	250,000	0	卒業証書用ホルダー
5	卒業周年記念品費	500,000	500,000	0	卒業周年記念品
6	会議費	400,000	400,000	0	役員会、評議員会等経費
7	支部連絡費	400,000	400,000	0	支部会補助
8	生徒奨励費	1,200,000	1,200,000	0	生徒会補助、生徒会活動功労賞
9	生徒活動補助費	800,000	800,000	0	部活動補助
10	別途積立金	1,000,000	1,000,000	0	別途積立会計へ
11	慶弔費	100,000	100,000	0	香料、弔電
12	事務局費	1,000,000	1,000,000	0	担当者手当、郵便振替手数料等
13	旧本館活用事業費	920,000	920,000	0	事務用品・旧本館公開経費
14	海外研修旅費	600,000	600,000	0	生徒海外研修引率旅費
15	予備費	333,000	273,000	60,000	
	合計	11,703,000	11,643,000	60,000	

※項目間の流用を認める。

上記のとおり提案いたします。
令和2年3月31日
茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長　大野　金一

寄附金がありました

（令和元年11月1日～令和2年10月31日まで）
吉波　弘様（高校22回卒）　20,000円

資料提供のお願い

旧制中学校・高校の同窓生の皆様が発行された記念誌等（データでも可）を本部にご恵贈下さい。展示・保存・校史編纂の資料として活用させていただきます。

新刊本紹介「戦時下の土浦中学生」

今般、松井泰寿先生（高21回・本校旧職員）が『戦時下の土浦中学生』を自費出版されました。進修同窓会『月刊アカンサス』に執筆されたものに加筆し、編集されたものです。「教練の始まり」「土浦中学の教練」「霞ヶ浦海軍航空隊」「軍国主義の波」「予科練」「振武特別攻撃隊長」「第一海軍航空廠」「戦時下の土浦中学生」「戦時下の小学生」の9章からなり、満州事変から終戦までの旧制土浦中学生とその卒業生の足跡を綴っています。『月刊アカンサス』については、本同窓会ＨＰでご覧下さい。（鴻）

令和３年度　進修同窓会定期総会の開催中止

来年度の定期総会について、令和2年10月3日に臨時正副会長会議を開き、協議いたしました。その結果、新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない状況に鑑み、同窓生の安全確保の観点から、やむを得ざる措置として、来年度4月11日（日）に開催予定であった進修同窓会総会を中止とすることに決定いたしました。総会議案については、今年度同様、評議員会の議決をもって総会の議決に代えさせて頂くことも確認いたしました。皆様には何卒ご了承の程お願い申し上げます。

また、学年ごとの祝賀会等については、各学年代表幹事の意向に沿ってご相談にあずかりたいと思います。周年該当学年の皆様には、それぞれの学年代表幹事と連絡を取り合いながら、ご対応いただけますよう宜しくお願いいたします。

編集後記

今年はコロナ禍が席巻。不要不急の外出自粛・3密回避・マスク必須等が呼ばれ、春には学校休校や緊急事態宣言発令に。東京オリンピック・パラリンピックは延期。様々な学校行事・本同窓会総会・旧本館公開等も中止へと▼飯塚哲哉氏（高18回）から母校へのＡＩ検温システムのご恵贈。危機に際し、同窓生の熱い絆が眩しく…▼ＮＨＫ朝ドラ「エール」では、5月11日～15日に旧本館が東京帝国音楽学校に幾度も変身。西洋風の香り漂う佇まいが一際目を引き、気高い趣に感動、との多くの声が…▼本紙面は、従来の総会・各周年同窓会の報告を『同窓会資料』の祝辞・謝辞等に、その他も変更を余儀なくされました▼本校附属中学校開校の来年こそ、皆様にとっても、幸多いことを願って止みません（鴻）

進修同窓会会報第77号
発行日　令和2年12月1日
会報編集委員会
委員長　武井　秀一（高23）
委員　飯村　弘（高5）
櫻井　忠男（定53）
高山　了（高18）
竹井　茂雄（高19）
鈴木　義人（高21）
鴻巣　茂（高21）
黒岩　英行（高23）
大久保　博（高37）
校内　片岡　達郎（副校長）
櫻井　隆之（教頭）
新堀　隆久（教頭）
中島　健一郎（教頭）
張替　晴男（事務室長）
浅野　周一（高38）